



本間 毅 新連載

日曜にも関わらず、前日の2020年2月16日に開催された専門家会議(正式の呼称や構成員は不明、議事内容も見当たらないまま、現在は「分科会」と呼ばれています)を境に、全くの異分野から登庸された厚労省トップK氏の、不自然なヘアスタイルと口調が微妙に変化し始めたことに気付かれた方はいらっしゃるでしょうか。翌2月17日昼のニュースで、相変わらず原稿を棒読みするK氏の眼差しは明らかに泳いでいました。その瞬間、「これは中国の一部の地域とクルーズ船だけの問題ではない、長い危機の前触れだ」と私は確信しました。周囲には「考えすぎ」、いや根拠がないので「妄想」とも言われましたが。そういえば2019年の第11回大会の企画ワークショップで、このごろ妙に蓮如上人の「白骨の御文」が頭に浮かんで仕方がないとカミングアウトした覚えがあります。

昼休みのうちに、家内のバースデープレゼントと考え予約した「ねじまき鳥クロニクル」の観劇をキャンセルし、ひと月後に当研究会の第11回事例検討会でプレゼンテーションを担当する二人の医師と、30名を超える参加希望者全員に検討会と懇親会の中止を知らせるメールを送信しました。

その夜、帰宅した私の顔つきは「脱魂したシャーマン」のようだったと妻は言います。

呑気に口笛を吹きながらパスタを茹でている場合ではない。徹底的に自分と向き合い、井戸(id イド)を掘込まねばならない時が来たのです。

2020年2月17日、我々が住んでいた世界のねじは、確実に一巻きされ、当研究会の活動も完全にフリーズしました。それをデフロスト(解凍)したのは、11月13日～15日に開催された第12回大会だったのです。

コロナ禍中、「幾度となく会い、語り合うことの意味」を考える
P337～

河野 暁子 新連載

2006年から2011年まで参加していた、国境なき医師団の活動について書いています。ずっと心の中にあつたものを、ようやく文章にすることができました。長い間寝かせていた物語は熟成され、当時の私では書けなかった内容になったと思います。ひとまず3回の連載を目指します。お読みいただければ嬉しいです。

この世界で生きるあなたへ
～国境なき医師団の活動～
P351～

楊 梓(ヨウ シ) 連載第二回

最近、麻雀をやりました。中国出身だが、麻雀をまともにやったことがないです(笑)。麻雀用語がほとんど中国語のカタカナ読みなのが初めてわかって、しかも標準語ではなく、どこかの方言も混ざっているような読み方で、とても面白かったです。麻雀の歴史や日中ルールの違いなどますます興味が湧きました。

アダルトグッズOL日記
P285～

土元 哲平 連載第二回

今回は、私の博士論文についてのテーマで執筆させていただきました。博士論文執筆中は、オールボー大学(デンマーク)やヌーシャテル大学(スイス)などに、毎年文化心理学を学ぶために留学していました。最近では、2020年3月にヌーシャテルに滞在しましたが、まさにコロナの時期での滞在になり、非常に印象に残っています。

ヌーシャテルには、文化心理学の集中

講義と、研究に関する議論をするために渡航しました。ただし本来は、この渡航は、スイスだけでなくブラジルでの国際学会参加を含んだ、3月末までの渡航になる計画でした。それが、コロナによって、3月19日に途中帰国となってしまったのです。

スイスでは2020年3月16日に緊急事



態宣言が出され、街が静まりました。店舗はほとんどが閉店になり、スーパーが開いている程度でした。大学も休講となったので、研究活動も中断せざるを得なくなりました。航空便を変更できたものの、鉄道やフライトの中止が相次いでいたため、日本に本当に帰れるかどうか、とても不安に感じていました。

スイスに滞在中は、絵を描いていました。絵を描くと、どこか気持ちがすっきりします。この絵は、緊急事態宣言前に描いたものですが——スイスの美しいアルプスと、ヌーシャテル湖を描きました。遠くにうっすらと見える山脈が、写真だとどうしても見えづらく、ホテルに戻ってから写真をもとに想像して、絵に描いたものです。

ヌーシャテルも、今は少しずつ活気が戻ってきているのでしょうか。あの美しい、小さな町にまた行きたいと、時々思います。前回は不安の中での滞在・帰国となってしまいましたが、今度はゆっくりとした時間を過ごしたいものです。

キャリアと文化の心理学
P287～

安 發明子 連載第二回

フランスでは11月23日現在外出制限が功を奏して9万人まで増えた1日あたりの陽性者数が4000人にまで下がっている。しかし、そもそも1日あたりの検査数

が日本の 15 倍から 30 倍あったので、「海外は危ない、日本はまだ大丈夫」という日本の報道には違和感を覚え続けていた。かつ、こちらの週ごとの死者数の合計は 5 月以降去年や一昨年に比べて多いわけではないということも日本では報じられていない。日本の感染者数についてフランス人は信用していない。福島原発事故のときの政府の対応が再三引き合いに出される。信頼を得るには透明性こそが大事であると思う。

調査先の福祉機関はどこも「腕の見せどころ」と言わんばかりに元気で、創意工夫や新たな取り組みを日々話し合っている。

特に 11 月に入ってからクリスマスに向けたプロジェクトの数々が話し合われている。例えば「逆のアドベントカレンダー」企画は全国的に毎年展開されているものだが、参加者はクリスマスまで毎日一つずつプレゼントをリュックか箱に詰めていき最後にラッピングして、男性用女性用ユニセックス、幼児用男児用のいずれか書いてホームレスやシェルターにいる人にプレゼントするものだ。クリスマスを暖かい気持ちで過ごせるように、マフラーや暖かい下着、歯ブラシやいい香りのシャンプーやきれいな柄のバスタオル、ハンドクリーム、文房具、楽しい気持ちになる読み物、チョコレートやドライフルーツなどが喜ばれるらしい。誰かの幸せを想い毎日つめていく楽しみも味わうことができる。皆で力を合わせなるべく良い年末が過ごせますように。



(写真は町の薬局前に置かれた PCR 検査のテント「結果は 15 分、予約なし、8 時半から 20 時まで」と書いてある。無料で何度でも受けられる)

フランスのソーシャルワーク

P300～

玉村 文

先日、職場の若手職員数名を対象にした研修の講師を引き受けました。2 年ほど現場を離れている間に若手職員の顔ぶれも変わり、初めましての出会いもありました。そんな普段接点のない若手職員との交流の機会にもなり、少し人となりを知り合える貴重な機会になりました。

研修は知識の伝達や支援観の共有だけではなく、どんな人が何を言うのかで受け止め方が変わっていくものだと思っています。今回、わたしのことを知らない若手職員へ、わたしの人となりからお伝えすることにしました。どんな思春期・青年期を経て、現在に至るのか、どんなキャリア形成を描いてきたのか、そのうえで研修テーマの話に入っていました。一方的に自己開示をする気恥ずかしさはあったのですが、できるだけ正直にそしてキラキラしていないリアルな自分を提示することに勤めました。そうすると、ああ、研修の講師って参加者と向き合うことだけじゃなくて、自分とも向き合うのだなと気づかされました。日々の現場ではなかなか築にくい、同僚観の絆を研修という場では作れるのではないかと思います。現場を少し離れて研修という形で、ともに学び合う場に身を置く重要性を感じました。同僚とリスペクトしあえる関係を築きたいなと強く思う今日このごろです。

応援 母ちゃん！(1)

P278～

川畑 隆

前号の「かけだ詩②」の「帰着点」ですが、一字抜けて、「騙しやすい」が「騙しすい」になってました。「や」が抜けたら血が出ますなんて言ってる場合じゃなくて、そもそも文字の少ない原稿ですから、さらに目をさらにしたいと思います。

94 歳の母が福岡の特別養護老人ホームにこの春からお世話になっていて、しばらく面会禁止だったのですが、15 分間の予約制で会うことができました。他府県からということで、面会の 2 週間前からは会食を控えるようにとの注文もつきました。施設の入口では消毒→手洗い→消毒と

厳重でした。老人に感染させたらそりゃたいへんですからね。

アクリル板越しかなと勝手に想像していたのですが、玄関ホールのソファにふつうに座ってマスクをつけました。母からの「隆はどこに住んでるのか？」「自分はどこにいるのか？」…それが話題の中心でした。私のことも兄たちのこともわかっているようで、「元気に過ごしてらっしゃいますよ」と職員のかたからうかがいました。

施設はけっこうな山の中でした。「自分はどこにいるのか？」…私もちょっと不安になりました。

「かけだ詩 ②」

P269～

天川 浩

紅葉の時期になりました。私もまだ一枚も売れていませんが、プロの写真家の端くれとして、京都の左京区の下鴨神社に紅葉撮影しにいきました。素晴らしい紅葉を前に快調にシャッターを切っていました。本殿にお参りして、お賽銭を入れようとしてカバンを見ると、お札とポイントカードの入った財布が見当たりません。落としたと思い、二時間ほど探しましたが、ある訳ありません(笑)交番に行きましたが、「もっかい戻って探して来い」と回答されました。電車の役務室で、事情を説明しましたが「あなた自身が落としたんでしょ？自己責任ですよ」と門前払いされ、下鴨警察署の落とし物係りの綺麗な女性警官に「お金借りられるかもって甘い考えで、ここに来たんですか？」とドメを刺されて呆然としましたが、これはもう歩いて帰るしかない、と意を決し、11 月だというのに 25℃もある炎天下を 5 時間歩いて、帰路に着きました。脱水症状になりかけて、東福寺の交番に「頼むから腰掛けさせてくれ」と頼むと、署員の方が、ジュースをさしだしてくれました。慈雨とも甘露とも思いました。

そして、ふと思いました。「私には、こんな時に『助けを求める人間はだれ一人としていない』のだ」ということでした。とてもよい勉強になりました。これからは鎖で財布を体にグルグル巻きにして外出したいと思います。無縁社会がなくなりますように活動していきたいです。

ブルーグレーの肖像

篠原ユキオ

断捨離の中で長い間書庫の隅に並べていた百科辞典を捨てた。70年代にはちょっとした家には必ずあった平凡社の大百科辞典である。一度も開くことのなかった刊もある。多くの家庭でもただ並んでいるだけという家も多かったのではないかと思う。イザという時のためにと大学を出た頃買ったものだったが結局、活躍の場は数えるほどしか無かった。一緒に亡妻の文学全集も捨てた。世の常識や知識はどんどん古くなる。自分自身も更新できなくなったら断捨離かなと思ったりする。



HITOKOMART
P281～

原田 希

牧場の仕事と家事で一日があっという間に終わる生活。原稿もわずかな時間を見計らって一日5行ずつというペースです。勤め人時代からなんでもソツなくやってきて、内心はアップアップしていても、それを見せない主義でした。

牧場でも貰ってきたけれど、もう体力がぎりぎりです。ごはん作りを機械に任せることにしました。具材と調味料を入れてボタンを押すだけの電気自動調理鍋を購入。これは大助かり！ありがとうハイテク！クリスマスのビーフシチューもこれにお任せしよう。年末年始も休まず働いている酪農家ですが美味しいものが食べられるならがんばれます(単純)！

原田牧場 Note
p～

工藤 芳幸

大阪に引っ越してきて9年目にしようやく部屋が片付き、きれいな床が見えました。毎年とにかく自転車操業で、少し片づけては放置。途中、大阪北部地震で本棚が全部倒れた事態を経て、大量の本を段ボールに入れてブックオフと往復しようやく…です。自分の身のまわりのことを後まわしにして、外向きのことばかりしてきた時間だったように思います。今年新しかったことは、オンラインの読書会に参加し始めたことです。仕事絡みの読書ばかりしてきたので、ちっとも読み進めることができずに悪戦苦闘していますが、なかなか良いと思って自分でも新たなオンライン読書会を企画。現在、3つの読書会を並走中です。また、読書会で読んでいる本から派生し、引っ越し前から放置していた本を引っ張り出してきて、隙間を見つけては自分のペースで読み進めています。長女が書店員のアルバイトをしていて割引がきくというので調子に乗って新刊本を仕入れてしまい、ブックオフに売って空いたスペースがまた埋まってきているので、年末までにはまたブックオフに行かないか…と思案しているところです。

みちくさ言語療法
P 265～

高名祐美

コロナ禍。終わりのない自粛生活。職場は医療機関。感染予防のため、私には「Go to travel」も「Go to eat」も縁がない。兵庫県の孫に会いに行きたいが、それもかなわない。自宅と職場の往復に、スーパーへ食品の買いだしをするだけの日々。

研修会や学会は中止からオンライン方式へ。会場に行かずとも自宅にしながら学べるはずなのに、なぜかテンション低め。パソコンと向き合う時間が多くなり、眼精疲労と肩こりが悪化する。

そんな日々、最近楽しい出来事があった。職能団体の会長を拝命していた時代、副会長を務めてくれた二人の仲間と久しぶりに会ったのだ。一人が私の住む地域に、講演で来ることになり、もう一人も便乗してやってきてくれた。外食は禁止なので、我が家で出前のお寿司をふるまいながら思い出話に花をさかせた。

三人で会うときは、なぜかいつもブレ

ゼント交換になる。今回は色鮮やかなマフラーを準備したのだが、もう一人もマフラーを準備していた。それがまた話題になって、会話が盛り上がる。いただいたマフラーは最近の通勤に重宝している。他の二人も私が選んだマフラーを気に入っていただけたようで、ラインにメッセージが届く。もう一人から、マフラーのお礼にとプレゼントが郵送されてきた。またそれで盛り上がる。

仕事以外で「人と会う」「人と話す」「人の話を聴く」その醍醐味を久しぶりに味わった。やっぱり私は人と向き合うことが好きなのだ。そう思った。七尾まで来てくれたお二人に感謝。

MSWという仕事
P257～

大石仁美

プライドの壁

TVドラマの中で、「何か私に出来ることがあれば」と申し出た人に対して、「憐れみは要らない！私にだってプライドがある！」と叫ぶ場面を見てドキッとした。

無意識に人を傷つけていることは一杯あると思う。確かにそうだ。同情や哀れみは人を傷つける。だけど待てよ。なんか違う。自己弁護かもしれないが違和感がある。「そんなプライドなんか捨てろ！」と私は叫びたい。

困難にぶち当たって、苦しんでいる人を見たら、何かしてあげたいと思うのは自然の心理。それを上から目線の同情だと言って切り捨ててしまうのは、かなりのひがみ根性。確かにプライドは大切だ。自分が自分であるための最後の防波堤かもしれない。

「不必要に相手の心に踏み込まない」という鉄則さえ守っていれば、「助けてほしい」「助けたい」と思い、自然に素直にお互い心が動くとき、人から人へと繋がる温かく強い力が沸き上がることを私は知っている。

人が喜ぶ姿を見ることはとても嬉しいこと。例え同情からであったとしても、喜ぶ姿に接し、もっと何かしたい、自分に何かできることはないかと思い始めたとき、出

来ることの限界に気づき、物事の大きさに気づき、そして小さな自分に思い至る。

つまり、助けてもらった人が素直に喜ぶと、助けたほうの心に変化が生じ、たとえ上から目線だったとしても、それは消失するのである。プライドの壁が人を不幸にする。プライドが高いと誰も幸せにはなれない。

病児保育奮闘記(最終回)

P164～

岡田隆介

「子どもからこんなことを聞かれたら」シリーズが終了し、次の「家族援助、二つの取っ掛かり」シリーズに取っ掛かる。次の準備ができてないと不安になる、この強迫性は昔からだ。いい加減に解放されたいと思う一方で、そんな自分も悪くないとも思う。つまるところ、どの自分も嫌いじゃないのだ。めでたし、めでたし。

エア絵本 -ビジュアル系子ども・ 家族の理解と支援(4)- p40～

一宮 茂子

【毎朝 10 分間のすこやか体操】
毎日、あるセンターに行って朝 10 時から「すこやか体操」をしています。もう何年つづいているのでしょうか。少なくとも足かけ 7 年以上にはなと思います。たった 10 分間ですが、真面目にすれば筋肉トレーニングにもなります。参加者はそれぞれの年齢や体調にあわせて身体を動かします。今年はコロナの影響で集まる人数は 20 人くらいです。もうすっかり顔なじみになりました。私が毎日「すこやか体操」に参加する理由は、日々の生活のリズムを整えること、地域社会と繋がりをもつこと、さまざまな人たちに会うこと、地域の情報収集をすることなどです。在職中や大学院生時代では味わえなかったこの生活。ありふれた生活の繰り返しですが、何よりも心のゆとりと安らぎが嬉しくおられる毎日を過ごしています。

生体肝移植ドナーをめぐる物語 P239～

松岡 園子

昨年から習い始めたジャズダンスの発表会が 11 月に行われ、私はこれが初舞

台でした。コロナ対策も叫ばれる中、こうした舞台を企画し実施に移していかれたインストラクターの先生や関係者の方々のパワーは凄まじいものでした。

「ダンスを通じて伝えられるものがある」という信念のもとに指導を続けてこられている先生や、踊ることが大好きな仲間からは、身体表現の場に立つことができる喜びを教えてもらいました。

これまで何かを表現するといえば文章を使うことが多かったですが、身体を使って表現していくこともこれから更に深めていきたいと思います。

統合失調症を患う母とともに 生きる子ども P234～

杉江 太郎

児童福祉現場で働く杉江と言います。職場では、ZOOMが大盛況である。私自身のパソコンも「ずーむ」と返還すると「ZOOM」と勝手に出てくようになっていく。私の職場では、ZOOMを使って、子どもと親の面会や、会議、実習、そして研修などが行われるようになった。時間を選ばず、感染を防ぐその方法は何と便利なことだろうか。プライベートでもZOOMでの研修が増えている。そのおかげなのか、そのせいなのか、遠方への出張が皆無になっている。研修をきっかけとした、新しい土地への旅行も当然ない。今までは、新幹線や飛行機などの路線の広がり、移動中にもパソコンを使い、日帰り出張の範囲が広がり、忙しさを増したように思っていた。ZOOMはその先を行き、その範囲から離れずとも繋がるようになっていった。なんと素敵なことなのか。ただ、そのせいで新しい土地にアクセスできなくなったのは、寂しい限りでもある。

「余地」-相談業務を楽しむ方法- P～

迫 共

ひとり親支援のための一般社団法人 1×1(ワンバイワン)を立ち上げ、代表理事に就任しました。サッカー日本代表の長友選手が呼び掛けた基金から支援を受けて、静岡県下で食料配布会を行い、新聞にも取り上げられました。コロナ禍の状況

で、こども食堂よりも直接支援が必要なご家庭が顕在化しているように思われます。年末にかけても食料配布会を実施します。支援を必要とする人たちが、無事に年を越せますように。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ P226～

朴 希沙(Kisa Paku)

私事ですが、9 月末に子どもが生まれました。妊娠中も大忙しで過ごした日々。実際子どもが生まれてきたらどんな気持ちになるのかなあ、かわいいと思えるかしら？ やっぱ特に最初はめちゃくちゃ大変なんだろうかと不安もいっぱいでしたが実際に生まれてくると「か、かわいい……!!」自分に似ているからとかそんなんじゃないかと、出す音や仕草、表情やにおいまでとてつもなくかわいくて驚きました(笑) また私は幸運にも授乳や産後の回復も順調だったので、そこまで大変な感じもなく、「思ってたより大丈夫かも」という気持ち。でもその一番の理由はうちにお手伝いに来てくれている近所の人たちがいるから。産後から特に 1 ヶ月間は毎日家族以外の人たちにいてもらって、色々なことをおしゃべりしつつ家事や育児を手伝ってもらっていました。そんな我が家で今流行っている言葉が「コミュニティで(子どもを)育てる」。家族だけの閉じた空間から飛び出してコミュニティで子どもを育てる取り組みを始めよう！と試行錯誤しています。山あり谷ありますが、新しい出会いや学びも多い日々。

またここ数年取り組んでいたマイクロアグレッションの翻訳がついに完成し、12 月に『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション-人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』として明石書店より出版されます。もう amazon でも出ているのでぜひチェックしてみてください。これまで『対人援助学マガジン』で紹介してきた内容ももりだくさんの、日本では初めて翻訳出版されるマイクロアグレッションの基礎文献です。

マイクロアグレッションと私たち 休載

浅田 英輔

うちの協会の相馬事務局長が仕事で仲

良くしている保健師さんから「町立図書館にこころのケアの特設ブースを作りたいから協力してほしい」と相談を受けた。当会役員みんなで「あれがいいこれがいい」とアイデアを出して、それをもとに検討して作られたブースがこちら。私がおすすめした本もあってうれしい！

町立の図書館なのに、なかなか攻めたラインナップ。三戸町は、11ぴきのねこのまちでもあります。一度見に行かなければ！



臨床のきれはし
P116～

三浦 恵子

ボランティア仲間から次のような話を聞きました。

関東圏外に住む義母から電話がかかってきたとのこと。彼女は私同様関東圏に在勤在住しつつ、義父母の遠距離介護を続けていました。しかし今回のコロナ禍で義母からは自分が居住し働いている地域のことを「コロナの国」と称され、エッセンシャルワーカーでもある彼女に対しての差別的な発言もあったとのこと。

彼女の義母は「コロナが怖い」と自宅に閉じこもり、インターネットが使える彼女に対して様々な物資の要求を続け、彼女も介護帰省できない代替であると考え、繁忙な業務の合間にそれに応じていました。自分の仕事と義母の対応に本当に疲弊する思いだったと聞きました。

そんな彼女に対し、ある日その義母から「特別給付金が出た。高級な寿司が食べたい」と電話がかかってきた時には、さすがに力が抜ける思いがしたといいます。彼女は特別給付金については様々な団体等への支援に使うことに決めていたためその旨を伝え、義母の要求をさりげなく断ったところ、「そんなことやっている人なんて見たことがないわ」と言下に否定されたとのことでした。

今回の原稿の内容にも関連しますが、どれだけ多くの人々がコロナ禍に向かい合っているのか「閉じる」ことで見えないことが一杯あるのかと感じた出来事です。彼女の義母は今、Go-To キャンペーンに協力するのだという名目で観光地や温泉に繰り出しているとのことでした。「こうして金を使わないと経済が回らないのよ」「私たちが経済を回すのよ」と彼女を揶揄するように言い放ったとのことでした。

彼女のため息交じりの相談を受けながら、これは嫁姑アルアルの問題ではなく、今回の原稿で私が述べさせていただいた、「開く」ということを知らないままで過ごす人を身近に抱えることの大変さや、その人自身もまた世界を狭めているという不幸について実感しました。

更生保護施設官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という
観点から考える
P218～

黒田 長宏

私には菅新総理大臣と同じところと、右頬の真ん中にシミがある。メンズケシミンという商品があるのを知り、購入して使い始めた。まだ消えていない。

<https://konnankyuuujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚
P203～

山下桂永子

3 日前、インフルエンザ予防接種を受けました。ここ数年は毎年受けているのですが、毎回予想の 1.5 倍ほど痛いです。3 日経っても腕がパンパンに腫れてだるいです。

そういえば小さいころから痛い、辛(から)い、熱い、冷たいものが苦手です。炭酸も飲めません。ちなみにドッキリもホラ一も鬼ごっこも苦手です。なんでわざわざ怖い思いをしないとイケないのか全く意味がわかりません。どうやら人間としてのいろいろな閾値が狭いみたいです。心だけは狭くならないようにしたいのですが、そういうことが好きだったり得意な人からの「大丈夫やって」「大人になったら食べれる

って」という言葉、うっかり信じちゃって「だまされたいっすき！」ってなることが大人になってもしばしばあります。

今回からは、対人援助マガジンに新しいテーマで書かせていただきます。ちょっと前置きが長くなってしまって、ほぼ題名の説明だけで終わってしまったのですが、ブログと思って読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P184～

尾上明代

自分の表現活動の一つとしてダンスをしているが、コロナ禍になってからは、オンラインで個人レッスンを受けている。先生は香瑠鼓さん。(著名な振付師・アーティストなので、ご存じの方も多いと思う。)私のお気に入りメニューの一つは、好きな自然界の景色をイメージしたり、その「モノ」になって即興で踊ることだ。

今週は、昔、旅したことのある、カナダのビクトリアにある植物園に「行った」。ピンクのバラがたくさん良い香りを放ちながら咲いていた。その中の1本になって私は踊り出す。先生がその雰囲気にあった曲をすぐに選んでかけてくれた。私の雰囲気が曲選びに先行したが、曲がかかると、さらに私がその曲に合わせる。それを見た先生が、私の動きを取り入れつつ、違う振付で踊り出す。それに私がミラーリングする。という風に、一体感と新たな「発展的変容」が交互に混ざったダンスとなった。音楽とリズムとともに身体と表情で「表現」すると、「ああ、身体と心に良いことをした！」と実感する。こういう贅沢が、リモートで間身体的にできているのは、すごいことだ。

ドラマセラピーの実践・手法・研究
P76～

松村奈奈子

コロナコロナな毎日。
でもコロナ第2波と第3波の短い間に、「今はいいよね？」とオープンカフェでお友達と会う事しきり。いやー、人に会っていないなあ。お互いに話したい事&聞きたい事がたまっていたので、話は尽きません。たわいもない女子トークがメインですが、医療関係者ばかりなので、ちょっとした医療

情報交換もできました。そして、今は第3波。「コロナ収まったら、また会おうね」が合言葉です。

精神科医の思うこと P169～

鷗野祐介

このほど、『センス・オブ・ワンダーといのちのレッスン』(港の人)という本を刊行しました。よろしければぜひお買い求めください。



うたとかたりの対人援助学 P199～

柳 たかを

DIY ファイアーピット

奈良県の我が実家は JR 線路そばにある。敷地の線路沿いの高さ 1.5 メートルほどだったカイヅカイブキ(針葉樹)と桑の木が年を経るごとにどんどん成長し、陽の光も視界もさえぎるほど大きくなってしまった。桑は成長が早く枝が上にも横にも伸び広がり高さ幅ともに 5~6 メートルにもなり線路側に伸びた枝のために JR から文句がきそうだ。

インターネットには色々な庭木の適切な剪定時期や剪定方法を解説してくれるサイトがある。おかげで去年は伸びた木々の剪定をかなりやり遂げてスッキリしたが、1つ問題があった。

剪定後に出た大量の切り枝の処分だ。軽トラックに切り枝を満載し ゴミ焼却場で焼却処分してもらったが、1 回目、2 回目と持ち込んだ時、職員に聞かれた。「あと何杯あるの？」

処分場では毎日膨大な量のゴミ・廃棄物が焼却処理されている。車で地上 3 階の高さにあるゴミ投入口に行き、トラック 3 台分の駐車スペースからはるか下方の炉内にゴミを投げ入れるのだが、充滿する腐臭・匂いがキツイ。ここで作業する人は毎日大変だ…

持ち込むゴミは 100 キロまで無料、100 キロまでに抑えて数回に分けて持ち込む輩もいるかもしれない。神経質になるのも理解できる。

そういうことならば、我が剪定ゴミは自宅で薪にして燃やそう。昭和の昔、大人は長屋の前の生活道路で廃材・落ち葉などで焚き火(とんど)をした。残り火で焼き芋を焼いたりして食べた。

時々、薪や落ち葉を燃やすぐらいは可能なスペースがある我が敷地だが、大量の切り枝を敷地内で定期的に焼却するにはちゃんと焼却設備を作ったほうがいい。味気ないドラム缶炉より焚き火を楽しめる設備を作ろうと思い、調べるうちファイアーピットなるものを知った。炉を石や耐火煉瓦で囲みバーベキューなども楽しめる。このくらいなら自分にも作れそうだ。

焚き火に照らされ物思いにひたる姿を妄想をして「楽しいかも」と決定。2.5 メートル四方のレンガ敷の中央に直径 1.3 メートルの炉をうがつ。昨日はレンガの下のコンクリート床を打ち終わり乾燥を待っている、このあとレンガ敷きの予定。以前はコンクリート打設なんて素人の自分にできるのか不安だらけだったが今回で 2 回目。

DIY は完成がゴールとは限らず、製作途中で苦労と背中合わせのやりがい・楽しみがあると思う。団塊世代、日々の DIY 作業に気づきや発見をさせてもらっている。

東城区の昭和 思い出ほろほろメモ P176～

小林茂

今年も10月から体調が安定しない。今年の11月はこの年最高度にスケジュールが立て込んでいて堪える。北海道に来てから何時間経ってのことか、ずいぶん風邪をひきやすくなり、風邪をひくと回復までに異様に長引くようになった。免疫力というか、免疫機能が落ちているようだ。

年齢のこともあるのかもしれないが、これまでの仕事の忙しさなどがたまって持病持ちになったこともあるかもしれない。

しかし良いこともある。3年前までよりも一年一年、生活状況は大きく改善しつつある。毎年、ささやかでも成果を受け止められている。何事も一つ一つできることを積み重ねて、物事をより良く変えていけるのではないかと希望が持てている。素直に「ありがたいなあ」「感謝だなあ」と思う。短信を書くのにあたって、そんなことを感じる事ができました。

* 温泉話題は、新型コロナの影響もあり？このところ新規開拓できずに留まっています。出歩くことがあれば掲載します。

対人支援 点描 P166～

中島弘美

カウンセリングの仕事を始めたころ、不登校状態にある子どもさんとそのご家族に数多くお会いし面接をした。20 代のときは、思春期の子どもたちと年齢が近く、いまから考えるとジョイニングしやすかった気がする。

かれこれ 30 年以上たった今、ジョイニングしやすい年齢を考えると、初老や定年退職前後の世代になる。今後は、メインの相談が思春期カウンセリングから高齢者対象の思秋期カウンセリングへ幅広い世代に移行することになるだろう。

思秋期という言葉はあまりなじみがないかな？エルダーカウンセリングがいいかな、それとも、高齢支援相談がいいかな？

終活などの言葉が飛び交う昨今、これまでの経験を重ね合わせて、今後長くできることは何かをゆるりと考えている。

カウンセリングのお作法 P34～

団遊

例年の人間ドック。今年はコロナの影響で医師面談もなく、検査終了後すぐ帰れる予定だった。ところが看護師から居残り指令。待たされたあげく「不整脈が出ている」と知らされた。14 年目に初めてである。後日、心臓エコー検査と 24 時間ホルター検査を受けることになった。追加

検査当日、エコー検査後、身体にペタペタと心電図を取るラインをつけられ、首から小さなお弁当箱みたいなものをかけられる。「これで普通に 24 時間過ごしてください。お風呂はダメ。行動記録をこの用紙に書いてください」と言われ、素直に実施。不自由はないが、つい、さっき小便した時間を忘れたりしてしまう。

検査結果は、本号の発刊タイミングくらいに聞きに行くことになるそう。不整脈が出ていなければもう一度、になるかもしれないらしく、それは勘弁だ。「不整脈、顔を出してくれよ！」と願うなんて、なんだかおかしい気がするけど。

**人を育てる会社の社長が、
今考えていること**
P31～

村本邦子

コロナ以後、マイクロツーリズムに精を出している。最初の頃は、大阪の街をひたすら歩き回っていたが、夏になってすっかり歩かなくなり、時々、車でどこかに出かけて、花を見たり、森を歩いたりして、近くの道の駅で土地の野菜や果物をどっさり買って帰るという遊び方になった。県境を越えることもあるが、基本的に、オーブンスペースの自然を堪能している。

元気なうちは遠くを旅して、老後は近場を車で回ろうと計画していたが、老後が早くやってきた感じだ。日本にも素晴らしい自然がまだまだたくさんある。そして、車は電気になった。

周辺からの記憶 ー東日本大震災

家族応援プロジェクト(22)
P141～

國友万裕

今ダイエット中です。ボクシングジムに通い始めました。実はここの息子さんが教え子で、「是非、来てください！」と言われたからです。彼は真面目ないい子なので、彼にトレーニングしてもらおうと無料体験。50 年ぶりくらいでなわとび(笑)。やってみると意外に楽しいものです。チケット会員になりました。

彼はイケメンでカッコいいので、大きな

鏡の前で二人並ぶと見劣りするから、それがモチベーションになっています。1 年後にはもっとスッキリした体になって、彼と並んでボクサー姿の写真を撮ってもおかしくないところまでいこうと頑張っています笑。

その頃には 57 歳。おじいさんボクサー笑です。

男は痛い！
P106～

古川秀明

新型コロナウイルスの影響で令和 2 年 2 月以降の講演会&ライブは全て中止の状態の上に、過酷な免許更新となりました。だけど警察署の女性検査者の思いがけない優しさに触れ、温かい気持ちになりました。

講演会&ライブな日々

P123～

西川友理

京都西山短期大学で、保育士・幼稚園教諭の養成をしています。それから、支援者に向けた当事者研究会や勉強会を定期的に開催しています。その他社会福祉士養成などにもちよっと携わらせていただいています。

実は趣味で自由律俳句(季語、形式等にこだわらない俳句。種田山頭火、尾崎放哉などが有名)を書き溜めています。今の所、句集を出したいとか句会に参加したいということもなく、徒然なるままに、自分の精神安定の手段としてぼつぼつと詠んでいます。

「コロナの今を、残そう。コロナに関する句、詩、和歌、書を集めたいと思います。賛同される方はいらっしゃいますでしょうか。」

初夏、たまたまこの企画の主催者であるタグチユウスケさんのメッセージを知った私は、その瞬間に「強く賛同します、意味あることだと思います」とメッセージを送りました。

その渦中にいるからこそ見える、生活の中の気付きを記録しておくこと。それがあとから大きな意味を持つ。それを体感

的に知ったのは、この『対人援助学マガジン』を書かせていただいているから、だとも思います。

そして今年 9 月、集まった句から選出されたものが『コロナの詩 みんなでつくろう コロナ句集 Kindle 版』として発売されました。

私もいくつか作品を選出させていただいています。(本名ではありませんが…俳号というのもまだ恥ずかしくて、自分ではペンネームと思っています)読む人が読んだら私とわかる作品もあるでしょうが、今はまだちょっとどれが私かは内緒にさせてください。でも、誰が書いた句も生活の実感をともなった、ぎゅっとした句になっています。よろしければどうぞ。句集ですので、あっという間に読めてしまう、小さな作品集です。売り上げは制作費を上回った時点で、コロナ関係の寄付に回されます。まだ、上回っていません(笑)

コロナ句集製作委員会(著) タグチユウスケ(編集)『コロナの詩 みんなでつくろう コロナ句集 Kindle 版』めがね&カレー書房

「自由律俳句、詩、短歌、書。コロナ禍で詩人たちは、今を残そう、と呟いた。10 年後、20 年後、100 年後の仲間たちのために」



福祉系対人援助職養成の現場から
p62～

坂口伊都

Zoom での研修、会議、打ち合わせ等が増えました。今回は Zoom あるあるを少し紹介します。大学生相手に話をしましたが表情が見えないので話し難いですね。

ある程度、気持ちを無にして話している私
がいます。外部講師として参加した次の
日にコロナの感染者が出てキャンパス立
ち入り禁止になったそうです。

Zoom は、家ですることが多いので、ピ
ンポンが鳴ったり、犬が鳴いたり、ネコが
Zoom に乱入して落ち着きません。雄ネコ
の方は、来客があっても顔を出す性格で
すが、雌ネコの方は来客があると一目散
に逃げだして隠れます。でも、Zoom に乱
入するのは決まって雌ネコの方で、今なら
映るというのがわかっているかのようにや
ってきます。不思議です。

Zoom での大失敗は、夜の打ち合わせ
があって、昼に「今日の 19 時だな」と確認
していたのにも関わらず、晩御飯のハン
バーグを作っていたらすっかりかんに忘
れてしまいました。それからは、カレンダー
に Zoom 予定を書き込むことにしていま
す。Zoom は気軽のようで、複数参加にな
ると、ねえねえという雑談が難しいです
ね。家でするのが楽なような、面倒くさい
ようなと思うのは私だけでしょうか。

家族と家族幻想 P136～

河岸由里子(臨床心理士)

【最近思うこと】スクールカウンセリングを
していると、色々な男の子に遭う。家族に
もよるのだろうが、男の子の様子が変わ
ってきた。

10 年前ころから、女子の方が元気で、男
子は元気がないと思うようになった。そ
の 3-4 年後くらいから、リストカッターやオ
ーバードーズが男子に増えたなあと
思うようになった。そして最近、過呼吸発作
を起こす男の子が増えてきたと思う。リ
ストカットやオーバードーズ、過呼吸発作
は多くの女子に見られた症状で、男子は
少なかった。それが増えてきた。

肉食系女子と草食系男子と言われたこと
があったが、その延長線上にこの状況が
あるのだろうとは想像していたが、こんな
に早く来るとは思っていなかった。

ミジンコは生息環境が悪くなって増えすぎ
ると、皆雌になるという。人間も地球上で
増えすぎたのだろうか？温暖化も進んで
いる。電磁波やら 5G やら放射能汚染やら、
環境が悪くなっている地球上で、人類は
生き残れるのか？

我が家のすぐ近くの雑木林が無くなり、太
陽光発電のパネルが建てられている。北
海道の自然もいつかは壊れてしまうのか
もしれない。なんだかなあ……。

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし
主宰

あゝ、相談業務 P68～ 先人の知恵から P194～

岡崎正明

GOTO トラベルで近場の温泉に家族で
行かせてもらった。古い旅館を見て名探
偵コナンの好きなうちの子は「殺人事件が
起きそう……」と期待と不安半々の感想を述
べていたが、起きた事件といえば夜中に
カメムシが出たくらいだった(それでも妻に
は大事件だったが)。

高級旅館ではないが 1 泊 2 食のちゃんと
した食事が出て、家族 5 人で 2 万円もか
からなかったのだから相当格安だ。ありが
たいことである。

嬉しい反面「このお金は誰が補填する
のだろう……」と考えないでもなかった。それ
は将来の私になるのか、それともこの子
たちか、そのまた子どもになるのか。詳し
い理屈は分らないが、結局先延ばしに
するだけのことなのかもな一とも思ったり。
でも今を生きなきゃいけないから、時には
先延ばしも必要だろう、なんて思いもよぎ
る。

温暖化や原発や領土問題なんていう大
きなテーマから、我が家の収納やたまっ
た写真の整理まで、私たちは何かと先延
ばしながら、ズルズル生きていくしかない
生き物なのかもしれない。やれやれ。どっ
かで向き合わないと。でもまったく先延ば
ししない生き方というのもまた、あまり健
康的ではないような気もしたり。バランス
が難しいなあ。

役場の対人援助論 P112～

大谷多加志

今号の執筆者短信を書こうとして、ふと
マガジン 39 号の執筆者短信を読み返しま
した。発行日は 2019 年 12 月、新型コロナ
の脅威に世界が覆われる前夜でした。

39 号の執筆者短信には、いつも通り、

執筆者それぞれの日常(日頃の悩みや葛
藤、これからの展望など)が雄弁に語られ
ていました。もちろん、そこに感染症の影
などありません。当たり前と思っているも
のが失われるのは一瞬で、そこには明確
な予兆も有効な対策もなかったりするの
だと、改めて実感します(39 号の短信には、
執筆者の中島弘美先生が阪神淡路大震
災で同様の感覚を持たれたことが書かれ
ていて、今読むからこそそのインパクトがあ
ります)。

新型コロナの影響が顕在化しつつある
春先に、17 年勤めた職場を退職し、あれ
これ掛け持ちのごった煮生活に移行しま
した。もし去年辞めていなければ、今年退
職を決意することは難しかったらうなあ
と思います。今年は、大学での仕事に加
えて、地域の小児科での心理相談や保育
園の訪問などを始めましたし、対人援助
学会にも初めて参加できました。新しいこ
とを始めると、また次にやりたいことが見
つかったりもします。最近の願望は、マガ
ジン執筆者の皆さんに会いに行くことです。
遠からず実現したいなと思い、ここに書き
記すことにしました。

発達検査と対人援助学 P119～

馬渡徳子

今年もライフワークの一つである「人権
講話」で、県内の自治体や学校、職場を
回っている。

過去 19 年間には、講演の後に質問時間
を設けても、殆ど直接質問を頂けることは
なく、代わりにアンケートに、回答依頼を
含めての質問や、感想等の様々な反応を
戴いてきた。

しかしながら、今年は違っている。
必ず、「自分の他人への怒りや、許せない
気持ちを、どのように処理していますか？」
「アンガーマネジメントが流行っています
が、効果はあるのでしょうか？」という直接
質問とアンケートへの返信を求めている。
質問や感想を記載頂いている。

「正しく新型コロナを恐れよう!」といわれ
るが、「非日常事態の長期化」にて、かな
りしんどい日々も、あったのだろうと察
すると、自分自身も振り返り、胸が熱くな
る。

私は、今年は、途中から、以下の絵本も

ご紹介している。この絵本は、定年まで保育士をされていた娘の配偶者のお母様より、ご教示頂いた。コロナ禍にて、TV でも、紹介されたとのこと。放課後児童デイサービスの支援員をしている息子も、よく子どもたちに読み聞かせているという。

☆オーレシー・シアン・ショウ・シーヌ 垣内磯子訳 **ガストンのきぶんととのえるえほんシリーズ**『おこりたくなったら やってみて!』『かなしくなったら やってみて!』『こわくなったら やってみて』『ねむれなかつたら やってみて』『やきもちやいたら やってみて』主婦と生活社☆

そのうえで、①まずは、自動思考を否定する必要はないこと。②自分の気持ちを切り替えるスイッチにつながる何か「魔法の決まり事」をつくること。例えば、私は、「父の死をきっかけに左手から右手に付け替えた時計を観て、父の口癖だった『逆に』という言葉をつぶやく」③寝る前に必ず、「今日の自分に贈りたい『褒め言葉』」を口にして、今日の自分をしっかりと労うことを習慣とする。

この絵本は、我が家にも置いてあり、③は、孫たちにも伝えて、孫がお泊りに来たときは、必ず実行するようにしている。

対人援助学マガジンの執筆者である水野スウさんの『褒め言葉のシャワー』は、20 万部を超えたそうだ。

「人権講話」では、事前の打ち合わせでキャッチした招聘先の状況に応じて、団士郎さんの『家族の練習問題』から一話と、『褒め言葉のシャワー』から抜粋して朗読し、講演の最後に『憲法 13 条の唄』かスウさんの作詞された『ふるさと』を唄い、二冊の本と CD を招聘頂いた学校や職場、団体に寄贈させて頂いている。

今年は、この件にまつわる、嬉しいエピソードもあった。

何と!その学校に、団士郎さんの本が全巻揃っているという。そして、そのきっかけをつくられた先生方より、研修参加環境が整い次第、「いしかわ家族面接を学ぶ会」へのワークショップへの参加をご希望頂けた。これで、またその地域での、垂直型ではない水平型の分野を越えた「つながり」が広がっていくなあとと思うと、ワクワクして、嬉しくて、直ぐに事務局仲間に報告した。まさに、「継続は力なり!」だ。

馬渡の眼

P172～

団士郎

73歳にして25歳時以来の独身生活になった。みんなそうなのと言えそうなのだが、やっと就職した独身時代に未来など皆目見えていなかった。しかし今回の独身生活は、どうのこうの言ったところで先が見えている。

限られた時間をどのように過ごすかは、自由に決められる。コロナ禍で多少不自由はあるが、残された時間をどのように使おうと気ままである。そんな時が人生に許されるのは僅かなタイミングだ。

朝起きる、さて今日は何をする予定だったかな?どの締め切りに手を付けようかな?しかし良い天気だなあ。京都散歩など楽しんでから仕事場に行くかな?どこで電車を降りようか?お昼は何を食べるかな?

そんなことを思い巡らせながらマガジンを作ったり、月刊連載漫画を制作したり、ワークショップの展開ppを作ったり。

Zoom による新しい企画も二つ順調に歩み始めているし、中国語版「木陰の物語」が12月には上海で発行されるはず。有り難いことに、まだまだ楽しみの多い人生である。

*

そう思って、悠々と編集作業をしていた。そしたら編集会議前日になって、自分の原稿を保存ミスで消してしまった。

思い出しながらもう一度書くエネルギーはなかったので、今回は休載にしようかと思った。ところが、校正用にプリントして、あれこれ書き込んだ紙が残っていた。

それをスマホで音読入力した。あっという間に9割方復活した原稿が出来上がった。それを今から明日夜の編集会議に向けてやり直した。

最近こういうミスが身近に続発だ。用心用心と言っても、それでおさまるなら起こっていない。

「Family history」(2)

P46～

鶴谷 主一

幼稚園業界もオンラインでの研修が多く開催されるようになってきました。ZOOM で視聴するぶんにはなんの問題も

感じてなかったのですが、主催する方に回ったとき、

その苦労を身に染みて感じました。

沼津市私立幼稚園協会で初の研修会を主催。会場となるホテルの ZOOM アカウントと機材を使って配信するわけです。当初は、会場で講演していただく様子をライブ中継するだけのはずが、講師の先生が「ZOOM では音声は聞こえないとまずいから」と動画にまとめてきて下さいました。

さて、こうなると配線が複雑になるんですね。

①会場で撮影しているカメラの音声 ②会場に数本あるマイクの音声 ③PC から出る動画の音声。この 3 種類の音源を会場のスピーカーと ZOOM で配信しなければならない訳です。

我々も素人、ホテルの人も素人、しかも機材はかなり年代物。

開始 2 時間前から準備し始めて…PC のメモリーが足りなくて途中でダウン! 会場の音声 ZOOM で流れない! 動画の音が会場に流れない! …などのトラブルが続出!

2 時間かけてなんとか開通し、ホッと開始したのも束の間…「音声は途切れる!」「反響して聞きとりにくい」の連絡が続出(>_<)。

結局、最初の挨拶はゴメンナサイで、動画の配信に切り替わり、なんとか研修は実施できました。

…次回からは専門家を頼もう、もしくはライブ中継と ZOOM の併用なんて難しいことはやめよう…と心に決めたのでありました。もっと新しい機材だったら問題なくできたのかもしれませんが。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から

P53～

水野スウ

東京調布のクッキングハウスへ恒例の、とはいえ半年遅れで、おはなしの出前に行ってきました。今回のマガジン原稿は、そのおはなし会の報告です。コロナの緊急事態宣言下も休まずレストランをあげ

続けてきた、クッキングハウス代表の松浦幸子さんの想いにもふれているので、あわせて読んでいただけたらうれしいです。

さて今回の短信では、京都在住の若い友人、長瀬正子さんが自費出版した絵本、『子どもの権利と新型コロナ』（発行元／ちいさなとびら 税込 1100 円）の紹介をさせていただきます。

正子さんは子どもの権利について研究していて、大学でも教えています。今年4月、「国連子どもの権利委員会」が、コロナのある世界でその権利が守られるよう出した声明を、平野裕二さんの翻訳を経て、正子さんがさらにやさしい日本語に訳しました。友人の momo さんがあたたかなイラストを描き、子どもが自分の気持ちを書き込めるスペースもあったらいいねと、ブックデザイン担当の mai works がワークブック仕立ての絵本にしました。

子どもとおとながこの本を一緒に読むことで、自分が大切にされる存在であること、その大切さにはちゃんと根拠があることを、子ども自身に知ってもらいたい、と正子さんは願っています。彼女は子どもの頃、「子どもの権利条約」というものがあると知ったことで、それがこの先のいろいろ大変なことを乗り越えて生きていく知恵や力になる、と感じたそうです。

今年の春以降、コロナで子どもたちは沢山のがまんを強いられているけど、その気持ちがちゃんと聴かれること、子どもが自分の考えや意見を言えること、子どもにもわかる言葉でコロナの説明がおとなたちからされること。どれもみな大切な、子どもの権利です。



さらに詳しく知りたい方は、正子さんのブログ、子どもと家族の小さな図書館「ちいさなとびら」をどうぞご覧ください。

<https://chisanatobira.exblog.jp>

絵本は mai works の webshop で通信販売しています。http://mai-works.com

きもちは言葉をさがしている P93～

荒木晃子

「GO TO トラベル」、「GO TO イート」を利用したことがない。普段から、神経質でも、慎重な性格でもなく、逆に、陽気で外出好き、美味しい・楽しい・新しいと聞けばどこへでも出かけるほどフットワークはいい方だとの自負がある。来るもの拒まず、会いたい人には会いに行き、食べたいものは（お財布と時間・体力が許す限り）遠慮しない。そんな自分が、連日、自宅で2匹の愛犬とじゃれ合い、飽きることなく自炊生活が続いている。対面で面会するのは、現在進行中の研究プログラムや講師依頼のプログラム打ち合わせ、対面カウンセリングを希望するクライアント、自宅向かいの高齢女性など我が家に出入りする人たちのみ。結果として、対面希望に呼応する体制となっている。

自宅向かいの高齢女性は、晩年一人暮らしになった私の母を気遣い常に交流を持ち続けてくれた方である。他にも、重篤な脳障害を持つ子どもの母親、一型糖尿病の疾患を持つ方など、感染リスクの高い方々との接点が多いため、私が感染するわけにいかないのだ。そして、もうひとつの自粛理由は、私自身が重篤な薬剤アレルギーを持つ、ということ。今年1月、インフルエンザに罹患した際も、相当な覚悟をもって治療薬を服用したばかり。薬を使っても使わなくても、結局は命がけ、という点ではどちらもハイリスクなのだが、自分がハイリスク群であることの自覚はないようだ。それがいいか悪いかは別にして。どうぞ皆さん、ご自愛ください。共に春を迎えましょう。

生殖医療と家族援助 P73～

中村 周平

2回連続でお休みして申し訳ありませんでした。思い出しながら書き出すことも多く、大切なことはしっかり記録しておく大切さを改めて感じています。短い文章で大変申し訳ありませんが、これから継続

的に発信させていただきたいと思っています。

ノーサイド P101～

山口洋典

「見えないものと闘った一年は、見えないものに支えられた一年だと思う。」

これは大塚製薬のカロリーメイトのCM「見えないもの」篇の一節で、私は11/18付でYouTubeにて公開された後、複数の友人から勧められて目にしました。同社のホームページの紹介文で「すべての受験生と、そして先生に贈るCMです。」と掲げられていることもあって、とりわけ教育関係に携わる友人の中には、コロナ禍の日々を思い起こし、さしずめ走馬灯のように受け止めたことで、涙をこらえずにはいられなかったと記しているものもありました。

確かに昨年の今頃は、まさかこのような仕事と暮らしが送られているとは想像だにしていませんでした。ちなみに前掲のCMの120秒バージョン

(https://www.otsuka.co.jp/adv/cmt/tvcm/202011_01.html)では、先述のフレーズの直前に「授業動画作るのも大変だよ。まさか早送りしてないよな？」と教員が動画内で語っているシーンが収められています。私は涙さえ流れなかったものの、自分の営みや思いが映像として遺されたように見え、阪神・淡路大震災の後にAERA（1995年2月20日号）の特集で「君は神戸に行ったか」と掲げられた記事を目にしたときと、何か通底する思いを抱いたことをここに記させていただきます。

PBLの風と土 P～

見野 大介

10月末に年内最後の個展が無事終わり、あとは注文の制作を残すのみとなりました。

今年はコロナで仕事もどうなるかと思いましたが、無事に年越しできそうです。来年もまだまだコロナの影響はありそうですし、仕事も健康面も引き続き注意が必要です。

ハチドリ器 P4

千葉晃央

子育て世代真ただ中だが、歯科に連れて行ったことがない。虫歯率は大激減だそう。歯科がコンビニより多いといわれているのに。背景にはフッ素と人工甘味料の普及がある。一方、そのフッ素、人工甘味料の副作用といわれているのがガン、鬱、認知症など。事実、自殺、ガン、認知症の増加という事象も当然といわざるを得ないか。

映画「プラスチックの海」を観た。20 年弱、リサイクルに関わったものとしては、その誇りも感じることができた。数千メートルの海底にもペットボトルなどのプラスチックのゴミが転がり、プラスチックが食物連鎖に入り込む。ペットボトルのバーコードを活用したドイツのデポジット方式、人体などの生き物に取り込まれたメカニズムなども明快に紹介されていた。プラスチックの影響で、肺疾患、ガンなどにつながることも示された。

こうした時代の中での影響は避けられない。とはいえ、現状を理解し、できることからやるしかない。プラスチックを見分けることができない生き物たちが地球上で山ほど暮らしているのは事実。その動物たちと共生してきたウン万年の歴史。たかが百年もいきない人間の頭で考えて、舐めてはいけない。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P17~

脇野 千恵

やはり、コロナ禍の話題に事欠かない日常です。自分の年を忘れることはないけれど、高齢者のリスクが高いと言われると、「えっ、私のこと？」と気がついてしまう自分に笑ってしまいます。いたって元気だからでしょうか。まだフルタイムで働く事が出来ています。

最近は、学校への出前性教育に招かれる機会が増え、中学生とのふれあいを楽しみにしています。教材研究に時間をかけることも大切にしています。何より好きなことができるって嬉しいです。

さらに、早期退職した元教員からの誘いで、週2回塾の手伝いをしています。有難いことに頭を使う機会は十分にあり、ここでも個別で子どもたちとの対話を楽しませてもらっています。これからも、頼まれたことはなるべく断らずに、自分のため、人のため、社会の一員として活動していくことをモットーにしたいと思っています。

今年も暮れようとしています。2020 年をどのように記録しておこうかと考えています。

こころ日記「ぼちぼち」part II
P254~

竹中 尚文

10 月に入って、同居する母親の変化がスピードアップした。ここ数年、彼女の認知機能に衰えが見られるようになった。92 歳になればそんなものだ、と思った。年齢が老化のすべての尺度ではないことも分かっているが、そんなものだった。チョットした発熱で病院に連れて行った。受診して薬の処方箋を出してもらえんと思っていたら。入院と言われた。後日、担当医から老衰ですと言われた。老衰を死と同意語のように思っていたが、身体の機能が老化によって衰えることであると理解した。妻が、退院をして自宅で死を迎えることは可能かと尋ねた。看取りを前提として、11 月半ばに母親は退院した。◆妻の決断に私は、少し驚いた。私は、母が病院か老人施設で死を迎えるのだらうと思っていたからだ。妻は、コロナ禍の中で母を医療施設にいさせたくないといった。一人で死に向かわせるのは可愛そうだった。父親が死んでから、私たち夫婦は母親との同居を始めた。妻と母との関係はギブ・アンド・ギブだなと見ていた。そして、妻は母親の看取りを決断した。家庭内関係の収支は赤字も黒字もないのかもしれない。◆共に暮らすうちに死を迎えることについて、母親は自分の希望を述べたものだった。死を目の前にして延命治療を望まないとか。私たちの家庭では、「死」という言葉ではなく「お(極楽)浄土に行く」といった。「お浄土に行くときは…」とか「お浄土に行ったら…」などという話し方をしたものだった。死に至る過程や死そのものや死後について日常会話で話していた。母親の希望を私より妻の方がよく聞いていた。おか

げで母親は自分の望むような死に向かっている。◆将来の起こることについて希望をしたことが、その通りになるとは限らない。だから、人生を生きる面白さがある。希望通りにならないからと、希望を持たない人がいるらしい。つまらない生き方だ。希望を持つべきである。生きるということは死に向かっていることである。だから死に希望を持つのである。その希望は周囲の人たちに伝えておかねばならない。「棺桶の蓋は自分で閉めることはできない」という言葉は、自分の死は必ず誰かの世話になるのである。自らの死というが、自分だけの死ではない。それは生が自分だけのものでもない、ということだ。私たちは関わり合って生きている。死も関わり合っていることだし、死後も関わり合っている。

路上生活者の個人史
P103~

中村正



小学館発行の『月刊スピリッツ』(2021 年 1 月号/2020 年 11 月 28 日発売)という漫画誌に連載されている「こころのナース 夜野さん」(水谷緑)に虐待親たちのグループワーク「男親塾」が登場した。コロナ禍の直前の 3 月のグループワークに取材に来られてその後も二時間ほど話し込んだ。熱心な方だ。漫画のためにコメントを求められてやりとりしていた。丁寧に学んだことを漫画にしてくださった。その発売日の 11 月 28 日、「日本子ども虐待防止学会第 26 回学術集いしかわ金沢大会」で「男たちの暴力をどうするかー虐待する父親への「男親塾」の取り組みからー」と題してオンライン講演をした。1 時間の講演だったが、この 30 頁程の漫画を読んでもらう方がわかりやすいと思う程によく書

けている。これを男親たちと児童相談所の職員に配布して、男親塾とは何かについて理解をしてもらうこととした。みなさんどうぞご覧ください。

臨床社会学の方法 P21～

寺田 弘志

新型コロナウイルスの流行がいつに収まりません。買い物かごの紫外線除菌装置「ジョキンザウルス」がイオンで導入されました。

続いて、紫外線を使ったお札の除菌装置が日立オムロンによって開発されました。1分間に1000枚ものお札が除菌できるそうです。1枚当たり0.06秒。紫外線の殺菌力はすごいようです。

紫外線の無い環境では、お札の上でコロナウイルスは1カ月も生きているという研究結果が報告されています。

前の号でも書きましたが、当院では、お札も硬貨も紫外線除菌しています。雑誌や空気をはじめ、除菌しにくいものが短時間で除菌できるので、重宝します。紫外線殺菌、お勧めです。

接骨院に心理学を入れてみた P212～

サトウタツヤ

あいついで二つの小説を読んだ。

村田エフエンディ滞土録 / 梨木香歩著
舟を編む / 三浦しをん著

前者・「滞土録」の「土」とは「土耳其」つまり「トルコ」。

後者・「舟を編む」の「舟」はここでは辞書のこと。

前者ではオウムが、後者では辞書の紙質の開発が、伏線として良い味を出していた。

対人援助学と心理学の縦横無尽 P84～

浦田 雅夫

「戦争孤児」、駅を転々とされていた「駅の子」だったOさんとお出合いで来た。

「人は出会いで変わる。」私も、Oさんとお会いできて本当によかったと思いました。何をしなければならないのか、自分のミッションを確認できました。ありがとうございました。

社会的養護の新展開 P51～

小池英梨子

そうだ、猫に聞いてみよう P187～

ABC朝日放送のニュース番組「キャスト」が人もねこも一緒に支援プロジェクトの活動を密着取材して、2回も特集番組を放送してくださいました。ありがちな「多頭飼育崩壊、悲惨、飼い主が悪い」という形の報道ではなく、社会問題であること、支援の内容も堕胎手術をせざるを得ない状況があることなどしっかりとした内容になっていると思います。

キャストのYouTubeから見るができます。良かったらご覧ください。

